

ロシア、反乱の世紀における中庸の指導者

—— ツァーリ、アレクセイ・ミハイロヴィチの場合 ——

三 浦 清 美

1. ビザンツ起源のロシアの統治者観とアレクセイ・ミハイロヴィチ

2022年2月24日にはじまったロシアによるウクライナ侵攻は、「プーチンの戦争」という呼称が示すように、プーチン大統領の独断によって引き起こされた。21世紀のこの時代において、昨日の平和を今日の戦争に一変させてしまう、このような独裁者の存在がなぜロシアで許容されているのだろうか？ 筆者は、その一因は、ロシア正教によって長年にわたり培われてきたロシア人の統治者観であると考えている。それは、国の頂点に立つ統治者を「神の代理人」として迎える、ロシア国民の伝統的な意識である。帝政ロシアでは、神の代理人とは、ツァーリ（専制君主）であった。共産主義のもとで理想社会を建設しようとしたソビエト政権も、共産主義という宗教をまつる「教会」であったように思われる。その当然の帰結として、生身の神としてふるまうスターリンが現れた。そしてソビエト崩壊後に登場したのがプーチン大統領だ。すべては同じ一つの流れのうえにあるように見える⁽¹⁾。

この統治者観はビザンツ帝国に遡るもので、「天上の神パントクラトールの地上における代理人が皇帝、アウトクラトールである」という考え方⁽²⁾である。この「アウトクラトール」という考え方は、コンスタンティノス大帝を皮切りに、キリスト教ローマ帝国の皇帝を性格づけている。ビザンツ史家和田廣によれば、「コンスタンティノス大帝は、地上のすべての支配者に優り、『生ける法』であり、『キリストの使徒と並ぶ者』であり、全世界の蛮族の攻撃からローマ市民を守る『新たなモーセ』でもあるとされた。…そしてすべての新皇帝は、『新たなコンスタンティノス』として、元老院、軍、市民より歓呼の喝采を浴びた。」⁽³⁾ 6世紀ユスティニアノス大帝の存在も重要で、ラヴェンナのサンヴィターレ聖堂のモザイク画では、皇帝として君臨するユス

(1) 産経新聞2022年3月20日、三浦清美「オピニオン プーチンを神にした『帝国』ロシア」。ほかに読売新聞2022年3月1日「視点ウクライナ危機 歴史と宗教観 背景に」；アエラ2022年4月25日「プーチンの『母殺し』の背景 宗教」；サンデー毎日2022年5月1日「識者が読み解くロシアの恐るべき近未来 プーチンのほうがマシという恐ろしい未来」；三浦清美『ロシアの思考回路—その精神史から見つめたウクライナ侵攻』扶桑社、2022年。

(2) 渡辺金一『中世ローマ帝国』岩波新書、1980年、51-54頁。

(3) 和田廣「『帝国統治論』について」『岩波講座世界史8』岩波書店、298頁。

ティニアノスと巻物をもつキリスト像とが重ね合わされている。アウトクラトールとは、人々に対しては神として君臨するのだが、神キリストに対しては僕として仕えるという位置づけをもつ。

キエフ・ルーシは988年、コンスタンティノープルからキリスト教を受容したが、そのときにこの統治者観も流入した。キエフ府主教イラリオンの『律法と恩寵についての講話』に見られたように、キリスト教を受容するという決断をしたキエフ大公ウラジーミルは、キリスト教をローマ帝国の主要宗教として受け入れたコンスタンティノス大帝に比せられていた⁽⁴⁾。

一方で、次のことも重要である。キエフ・ルーシ黎明期の歴史を記す年代記『過ぎし年月の物語』では、キエフ大公ウラジーミルは、ハザールのユダヤ教、ヴォルガ・ブルガール族のイスラーム、ドイツ人のローマ・カトリック、コンスタンティノープルのギリシア正教から改宗の誘いを受け、それぞれに調査団を派遣したことが記されている⁽⁵⁾。このことが意味するのは、キリスト教に改宗した当初から、キエフ・ルーシでは、ローマのキリスト教とコンスタンティノープルのキリスト教は、別の宗教と捉えられていたということである。では、東西キリスト教の違いはどこにあるのか。それは、神であるイエス・キリストをいかに考えるかの違いであると、筆者は考える。

もともとキリスト教世界では東も西も、キリストを絵に描くという習慣が定着していた。後発のイスラームがこれを、人間には不可知の尊い神を絵に描くとは何事かと論難した。当時、西欧よりも文明的にはるかに進んでいた東方のビザンツ帝国は、この批判の意味を理解し、一部の皇帝が神の像を軒並み破壊した。これがイコノクラスム（聖像破壊）である。一方、聖像を擁護する派も出て、ビザンツ帝国では8世紀から9世紀にかけて120年間にわたり国を二分する激しい内乱が続いた。結局、この論争は、キリスト教の原点に立ち返ることで決着した。つまり、神としてのキリストは絵に描くことはできないが、人間としてのキリストは描くことができる、いや積極的に描くべきだという結論に到ったのである⁽⁶⁾。

キエフ・ルーシは、ビザンツ帝国のキリスト教とともに、この神と人間に対する感受性をも受容した。聖堂は、イエス・キリスト、神の御母マリア、さまざまな聖人たちの絵で埋め尽くされたが、その結果、ロシアでは、思考のうえでは、キリストは神であり同時に人間であると理解するのだが、感性のうえでは、キリストが人間であることが迫ってくるように受け取られた。これは、西のキリスト教にはなかったことである。東方正教は、神であるキリストが人間になったという恩寵を強調する。神がキリストにおいて人間になられた以上、罪深い人間も自らの救済のためキリストの「真似び」をして神になる努力を惜しんではならないというテオーシス思想の顕在が、ロシア正教の特徴となった。

(4) 三浦清美編訳『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社、2022年、43頁。

(5) 國本哲夫ほか『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987年、99-122頁。

(6) 渡辺金一「イコノクラスム」『世界大百科事典 Ver.10』日立デジタル平凡社、1998年。

神の代理人たるツァーリというロシアの統治者観は、この思想に立脚し、いわば神と化した人間を求める。西欧のキリスト教は、宗教的権威のローマ教皇、世俗的権力の諸国の王が画然と住み分けてきた。しかし、東方正教では、天上の神の地上における唯一の代理人であるツァーリが君臨するのみで、そのツァーリは、キリストに対してはふつうの人間であり、僕として仕えるが、人間に対しては神として君臨するのである。

今般のような独裁者の暴走を目の当たりにしてもなお、筆者はこの「神の代理人」というロシアの統治者観そのものが悪の根源であるとは考えない。それは善い悪いの価値観の問題ではなく、いまそこにある現実そのものだからである。歴史というものがそれを象ってきた以上、そう簡単に崩れるものではないし、ムリに破壊しようとすれば、恐ろしい反動が来るのではないかと筆者は恐れている。たしかに、統治者がキリストのような善の化身であるならば、問題は生じないのである。私たちは経験則から、人間というものが善の化身には生まれついていないことを知っているが、にもかかわらず、身を削る努力によってキリストに近づかなくてはならないと、ロシアのキリスト教は教えてきた。この意味で重要な観点を与えてくれるのが、17世紀後半を生きたピョートル大帝の父、アレクセイ帝である。アレクセイ帝は、まさに神の代理人として古いロシアと新しいロシアの狭間に立ち、国の安定と人々の融和のために超人的な努力をした⁽⁷⁾。問題は、「神の代理人」がある信念のもとに暴走してしまったとき、それを阻止する有効な手段が見当たらないということなのではないか？

本稿では、「神の代理人」のあるべき姿は何かという問題意識のもとに、アレクセイ帝のケーススタディを通じて、ロシアにおける指導者の資質とは何かを考えてみたい⁽⁸⁾。

2. 同伴者としての指導者、アレクセイ・ミハイロヴィチ

アレクセイ帝【図版1】は、スムータの混乱のあとの時代、ピョートルによる西欧化改革の前夜を生きた。その中庸の姿勢は印象的である。

そもそも黎明期ロマノフ朝は、コサックとの良好な関係のなかから生まれてきた。「ヘトマン国家」と呼ばれるコサック集団の連合体がウクライナ国家の母体であることを想起するとき、今般のロシア・ウクライナ戦争と比較して、ロマノフ家黎明期のツァーリたちのコサックとのこの親和性は印象的である。ミハイル・ロマノフがツァーリに推戴されたのは、彼が「コサックたちの皇帝」⁽⁹⁾と言われるほどコサックの支持を獲得していたためである。アレクセイ帝が収めた軍

(7) <https://filit.jp/issue117/s07.html> (最終閲覧2022年5月31日)。古市憲寿氏との対談。『アヴァクーム自伝』について話すさい、アレクセイ帝についても言及している。

(8) 本稿の以下の部分は、2012年10月8日に同志社大学で開催されたロシア東欧学会、ロシア史研究会、日本ロシア文学会、JSSEES、4学会共同シンポジウム「リーダーとリーダーシップをつくるもの」の報告に若干の修正を加えたものである。

(9) 土肥恒之『ロシア・ロマノフ王朝の大地』講談社、2007年、63頁。



図版1 アレクセイ・ミハイロヴィチ（作者不詳、エルミタージュ美術館蔵）

事的成功も、正教のツァーリとしてコサックたちによって頼られたことが契機となっている。

アレクセイ帝は、1654年1月8日（グレゴリウス暦18日）、ポーランド王に反旗を翻したコサックの首領、ボフダン・フメリニツキイとペレヤスラフ協約を結んで、ポーランドとの十三年戦争に突入する。ロシアとポーランドの戦争がはじまると、すぐにスウェーデンが介入した。スウェーデン軍はまたたくまにポーランドに深く侵攻し、各地に壊滅的な打撃を与えた。のちに「大洪水」と呼ばれたこの侵略は、ポーランドの政治と経済の大きな分岐点となった。東欧の大国ポーランドの凋落がはじまったのである。一方のロシアは、スウェーデンとも対戦したが、カディスの和平で現状維持が確認された。1667年にポーランドとのあいだで結ばれたアンドルソヴォの和約で、ロシアはスモレンスクを含む西部、ウクライナ左岸、キエフの領有を認めさせた⁽¹⁰⁾。

アレクセイ帝は、いわゆる敬虔派と結んで、ロシア正教による国家の再建と東方正教の改造を目指した。ロシア正教への献身は、アレクセイ帝の生涯の大きな特徴である⁽¹¹⁾。敬虔派はやがて、正教会の教会儀礼をめぐって、ロシアの教会儀礼をギリシア、アンティオキアなど東方教会の標

(10) 和田春樹編『世界各国史22ロシア史』山川出版社、2002年、144-146頁。

(11) ファーマンは次のように述べている。「第3のローマはアレクセイ・ミハイロヴィチ以外の何人によっても統治されえないものであったろう。この信仰への情熱は彼の全生涯を貫くものであった。これはまさに、彼の思考と行動について多くのことを理解するカギである。」Fuhrmann Joseph T., *Tsar Alexis: his Reign and his Russia*, Academic International Press, 1981, p.31.

準に合わせたうえ、ロシア皇帝を東方正教の盟主として君臨させようと試みる総主教ニーコンと、あくまでロシアの故習に固執して儀礼改革には断固反対するアヴァクームら古儀式派に真っ二つに分かれ、ロシア教会の分裂という不幸な事件を引き起こすが、アレクセイ帝自らがニーコンとアヴァクームとのあいだに立って奔走する。アレクセイ帝は当初、ニーコンを支持してアヴァクームらに反発されるが、ニーコンが皇帝に対する総主教の優越を主張するにおよんで、ニーコンと袂を分かった。

アレクセイ帝は教会の分裂を回避することはできなかったが、国家の統合を守り、自らの息子であるピョートルに託すことができた。ロシアの故習を重んじる古儀式派は西欧化への最大の障害であったから、アレクセイ帝が忍耐強く彼らを国家から引き剥すことによって、次の時代に、ピョートル大帝の西欧化改革とそれに基づく国家の飛躍的發展が可能となった。

以上のように、アレクセイ帝はロシア史に紛れもない痕跡を残しているが、リーダーシップの影の薄さを感じる向きはあると思う。しかし、ここでの問題提起は、リーダーとしてのインパクトの強さではない。リーダーというのは、自分からイニシアティヴをとって事を起こすだけではない。実務経験、専門的な知識、特殊な才能をもった人間を見出し、その人間をふさわしいポジションにつけて仕事を任せ、ビジョンを描せたり、描かれたビジョンを実現する手助けをしたるなど、実際の局面では、受け身の姿勢をとることのほうが多いのではないか。リーダーシップという概念を、この受け身の立場から、すなわち、卓越した実務者に寄り添う「同伴者」という視点から考え直してみると、興味深いことが見えてくる。

有名な歴史家B・O・クリュチェフスキイは、アレクセイ帝について「彼はかなり受動的な人柄であった」と指摘して次のように述べている。「アレクセイ・ミハイロヴィチ帝は善良そのものの人物であり、すばらしいロシア的魂であった。私はこの人物のなかに中世ロシア最良の人格を見るのにやぶさかではない。少なくとも、私はこれ以上愉快的な印象をあたえる中世ロシアの人物をほかに知らない。」⁽¹²⁾クリュチェフスキイはアレクセイ帝をほとんど激賞しているが、この評価は「きわめてもの静かなツァーリ тишайший царь」とあだ名されたアレクセイ帝⁽¹³⁾の「同伴者としての指導者」たる資質に対するものだったと、筆者は考えている。アレクセイ帝は、古

(12) B・O・クリュチェフスキイ『ロシア史講話3』（八重樫喬任訳）恒文社、1982年、379頁。

(13) このアレクセイ帝についてのあだ名については、19世紀の末にE・П・カルノヴィチが次のように述べている。「我々の時代の小説家や劇作家たちばかりではなく、歴史家たちでさえも、アレクセイ・ミハイロヴィチ帝に『きわめてもの静かな』という呼称を奉り、この呼称が彼個人に捧げられた呼称であると考えているが、これは誤りである。17世紀後半のモスクワでは、ポーランドやイタリアの学校で学んだ説教者たちが来たことに伴い、ラテニズム（ラテン語の言い回し）が流入していた。すなわち、西側で用いられていたラテン語による皇帝の尊称である「Clementissimus」が、ロシア語に訳されて「тишайший」となったのである。この称号はフョードル・アレクセーヴィチ帝、イワン・アレクセーヴィチ帝にも、皇女ソフィア・アレクセーヴナにも用いられている。この尊称はピョートル1世にも用いられているが、ピョートル1世は明らかに『きわめてもの静かな』皇帝ではなかった。ピョートル大帝が皇帝 император の称号を採用するまで、教会の奉神

いロシアが新しいロシアに劇的に変貌する前夜を生き、強烈な個性をもったさまざまな人々の「同伴者」として、17世紀という「反乱の世紀」を生き抜いた。

3. 「反乱の世紀」17世紀に到るまでの前史

17世紀は、ロシア史ではめずらしく民衆の自己主張が前景化した「反乱の世紀 бунташный век」(アレクサンドル・パンチェンコ)⁽¹⁴⁾であった。このように事態が推移したのは、ロシアが孤独な正教勢力として真のキリスト教の継承者を自認することになったいきさつと深い関係がある。スムータにいたるまでの経緯とスムータの混乱のなかから這い上がろうとするロシアの歴史の展開を、14世紀に遡って見ておくことにしよう⁽¹⁵⁾。

キリスト教世界は7世紀前半にイスラームが台頭して以来、西のローマと東のコンスタンティノーブルという二つの中心をもっていたが、コンスタンティノーブルを首都とするビザンツ帝国がオスマン帝国の侵攻によって衰退すると、西方からの軍事援助を得る前提として、14世紀には東西教会の合同がさかんに議論されるようになった。1438年から1439年にかけてイタリアの都市、フェラーラとフィレンツェで開催された公会議では、ローマ教会がビザンツ教会を吸収合併することで東西教会の合同が決議された。ビザンツ教会に属するロシア教会の首長、ギリシア人府主教のイシドロスは公会議に臨席し、この決定を支持した。しかしながら、フィレンツェからモスクワに帰国したイシドロスに対して、モスクワ大公ワシーリイ2世は怒りを発し、イシドロスを幽閉したのち追放した。1448年、ロシア正教会は互選でリャザン主教であったイオナを府主教に選り、ロシア教会は独立した。やがて1453年にビザンツ帝国が滅亡して千年におよぶ歴史を閉じるとはほぼ時を同じくして、ロシアは生き残った唯一の正教国家として世界史の前面に躍り出るようになった。モスクワでは、真のキリスト教正教帝国としての独特の自意識が育まれはじめた。プスコフの修道士フィロフエイによって言説化された「第3のローマ」論がそれである。

「モスクワは第3のローマである」という言説は、プスコフ近郊エルアザル修道院の修道士フィロフエイが、モスクワ大公ワシーリイ3世に向けて書いたものである⁽¹⁶⁾。この書簡は、政治的

礼では長年にわたりピョートルに対して『きわめてもの静かなる、選ばれたる、敬われたるツァーリにして大公』という尊称が用いられていた。」*Карнович Е.П. Родовые прозвания и титулы в России и слияние иноземцев с русскими*. СПб., CC. 162-163.

以上の記述は、引用元を検証しつつ、*Википедия / ロシア語版 Wikipedia*の記事「*Тишайший (титул)*」を参照している(2022年8月2日最終閲覧)。

(14) パンチェンコの名著『ピョートル改革前夜のロシア文化』の第1章は、まさに「反乱の世紀」という表題がつけられている。*Панченко А.М. О русской истории и культуре*. СПб., 2000, CC.13-53.

(15) 14世紀から17世紀にかけてのロシア史の概観は以下の書による。三浦清美『ロシアの源流』講談社選書メチエ、2003年；田中陽児、倉持俊一、和田春樹編『世界歴史体系ロシア史1』山川出版社；和田春樹編『世界各国史22ロシア史』山川出版社、2002年。

(16) プスコフにおけるモスクワ大公の代官ミハイル・ムネヒンに宛てた書簡でも、同様の思想が表明されている。三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学』266-281頁。

なマニフェストというよりも、その神学的内容によって際立つものである。フィロフェイは、モスクワ大公国で誤った十字の切り方とソドムの墮落（同性愛）が蔓延していることを糾弾し、その責を君主に問うたあとで、次のように言う。

自らの帝国を首尾よく統治することができれば、そなたは光の息子となり、いと高きエルサレムの住人となるでしょう。…敬虔なるツァーリよ、守りを堅め、耳を傾けなさい。すべてのキリスト教諸帝国はそなたの帝国のなかで一つに合流しました。二つのローマは斃れ、第三のローマは立ち、第四のローマは存在しません。偉大なる神学者⁽¹⁷⁾の言葉のとおり、そなたのキリスト教帝国は別の帝国に取って代わられることはありません。キリスト教帝国に対しては、めでたきダビデの言葉が実現したのです。「これは永遠に私の憩いの地。ここに住むことを私は定める。」⁽¹⁸⁾

キリスト教正教の国であるロシアは、天上の神の地上における唯一の代理人であるツァーリ（皇帝）によって統治されていなくてはならない。まさしく「すべてのキリスト教諸帝国はそなたの帝国のなかで一つに合流した」のである。真のキリスト教であるロシア正教を世界に広めるという使命のために、ロシアはつねにその領域を拡大させていかなくてはならない。ここに表明されたのは、こういう思想であると筆者は考える⁽¹⁹⁾。このメシアニズム的国家観を骨の髄まで血肉化した人物が、16世紀の半ばを生きたイワン雷帝にほかならない。

3歳で父を亡くし、8歳のときに母を失い、17歳でモスクワ府主教マカーリイによってロシア史上初のツァーリとして戴冠したイワン雷帝は、キリスト教世界の真の盟主としての自覚を幼少時から叩き込まれてきた人物だった。イワン雷帝はその前半生において、選拔会議⁽²⁰⁾の輔弼を得て、かなり上首尾に統治をすすめたが、同じキリスト教世界の真の盟主としての自負が、後半生では、イワン雷帝を狂気に陥れた。イワン雷帝の後半生の狂気と「第3のローマ」論に代表されるロシアの国家的自意識は深いところでつながっていると、筆者は考えている。

イワン雷帝の狂気の直接の引き金は、愛妃アナスタシアの死とリヴォニア戦争の泥沼化だった。

(17) 神学者ヨハネのこと。中世期には、『ヨハネによる福音書』、『ヨハネ黙示録』、『ヨハネの手紙』の共通の作者と考えられていた。

(18) 三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学』286頁。

(19) 歴史家のあいだには、異論もある。栗生澤猛夫は次のように書いている。「正教会がコンスタンティノープルから自立することによって、モスクワ大公権の直接的『保護』下にはいることとなった。それは教権と俗権の強い結びつき、実際には前者の後者への従属というビザンツ的伝統のモスクワ版であった。…修道士フィロフェイによる『モスクワ第3のローマ理念』の提唱も、それがモスクワの世界支配への野望を表現しているとするしばしばみられる解釈は誤りであるにしても、このような側面から見ることができる。」和田春樹編『ロシア史』103頁。

(20) Избранная лада.



図版2 イリヤ・レーピン「イワン雷帝とその息子」(トレチャコフ美術館蔵)

窮地に陥ったイワン雷帝は、味方に裏切り者がいると決めつけて、親衛隊オプリチニキを編成し、正気の沙汰とは思われない殺戮を組織的におこなった。ロシア第2の都市ノヴゴロドは、町ぐるみ万を超える単位で抹殺された。イワン雷帝がこの世で唯一心を開いた最初の妻アナスタシア・ロマーノヴァとのあいだの息子で、聡明な若者として成長した27歳の皇太子イワンをささいな諍いから殴り殺した⁽²¹⁾。狂気に陥ったとしか思えないイワン雷帝の乱行の連続で、国土は荒廃し、

(21) ニコライ・カラムジンは次のように書く。「和平交渉のとき、皇子はロシアのために苦痛を覚え、大貴族たちの顔にも苦悩を読み取り、もしかしたらみなに漲る不平不満さえ聞きつけて、高貴なる熱情に満たされ、父のもとに行って、父親が自分を軍勢とともに敵を追い払うよう派遣し、プスコフを解放し、ロシアの名誉を回復することを要求した。イオアン（イワン雷帝－筆者注）は憤怒の動揺のなかで叫んだ。『謀反者め。おまえは大貴族どもとともに私を玉座から引き下ろしたいというのか。』そして、腕を振り上げた。ボリス・ゴドゥノフはその腕を押さえようとした。ツァーリは自分の錫杖の鋭い切っ先で彼にいくらかの傷を負わせ、自分の息子の頭をしたたかに打ち据えた。この不幸な男は血まみれになって倒れた。ここで、イオアンの憤怒は消えてなくなった。恐怖のために青ざめ、震え、茫然自失のうちにこう叫んだ。『私は息子を殺してしまった。』そして、息子に飛びつき、抱きしめ、接吻しようとし、深い傷から流れ出す血を必死で止めようとしていた。イオアンは泣き、叫び、医師たちを呼び、慈悲を求めて神に祈り、息子に赦しを求めた。」*Карамзин Н.М. История государства Российского. Т.9. Гл. 5. Продолжение царствования Иоанна Грозного. Столб. 208.* イリヤ・レーピンの油彩画「イワン雷帝とその息子」【図版2】は、この記事に取材している。

イワン雷帝がほんとうにその息子イワンを殴り殺したか否かは、永遠の論争のテーマである。この不幸な出来事を外国人によるいわゆるフェイクであると見なすロシア人も多い。2018年5月26日にモスクワのトレチャコフ美術館で、上掲の油彩画が酔っ払った男性によって損壊される事件が起こった。<https://www.bbc.com/russian/news-44264193>（最終閲覧2022年5月31日）この事件も上述のコンテキストのなかにある。

皇子イワンの死については、『モスクワ小年代記』、『プスコフ第一年代記』、『モロゾフ年代記』、『ピスカリョフ年代記』が記しているが、死の具体的状況については沈黙している。皇子がアレクサンドロフ村での喧嘩のさいに父親に傷つけられて死に到ったことを伝えているロシアの年代記は、『マズーリン年代記』である。

国力は著しく衰亡した⁽²²⁾。

イワン雷帝の狂気は、結局、700年以上つづいたリューリク朝の血統が断絶するという結果を招いてしまった。すると、今度はイワン雷帝の遺児ドミートリイ皇太子を名乗る僭称者がつぎつぎと現われ、ポーランドとスウェーデンの軍勢がロシア国土を蹂躪した。これが、1598年のフョードル帝の死から1613年のミハイル・ロマノフのツァーリ推戴までつづくスムータ時代である。

民衆のあいだから、ツァーリを称する者が次から次へと現われ、戴冠する者さえ出たのだから、ツァーリと民衆がこれほど接近した時代は、ロシア史において空前絶後だったといえる。また、外国勢力の干渉を排除したのも民衆であった。総主教ゲルモゲンが正教防衛、国土解放を回状によって訴え、これに応じたニージニイ・ノヴゴロドの商人ミーニンが組織し、スーズダリの公ボ

「7089年（1581年）、君主にしてツァーリ、大公イワン・ワシーリエヴィチは、年長の息子で、賢明な思慮と恩寵によって輝いていた皇子のイワン・イワノヴィチを、いまだ熟さぬ果実の房を猛烈な竜巻によってもぎ取るように、自らの鋭い切っ先で生命の枝から切り取った。皇子について人々はこう言い合った。自らの父の憤怒によって彼は病を受け容れ、病から死を受け容れたのだと。」 Полное собрание русских летописей. Т. 31. Летописцы последней четверти XVII в. М., 1968. С. 142. イワン・チモフェーエフの『年代記（クロノグラフ）』には、皇子の死についての次のような報知がある。「ある人々は、彼の生命は、何らかの芳しからざる振舞いを父にさせぬようにしようとしたために、父の手から受けた打撲によって消えたと言っている。」 Временник Ивана Тимофеева (Подготовка к печати, перевод и комментарии О.А. Державиной). Репринтное воспроизведение издания 1951 года. СПб., 2004. С.182.

しかしながら、イワン皇子の死の状況をもっとも雄弁に語るのは、外国人による記録である。フランス人傭兵のジャック・マルジュレは次のように言っている。「ツァーリが年長の息子を自分自身の手で殺したという噂が流れている。ツァーリは息子を錫杖で打つには打ったが、状況はもっと違っていたという話もある。皇子が死んだのは、撲打が直接の原因ではなく、少し時間が経ってから、巡礼の旅の最中に死んだというのである。」（ジャック・マルジュレ『ロシア帝国とモスクワ大公国の状態 Состояние Российской империи и Великого княжества Московского』）Россия XV-XVII вв. глазами иностранцев. Л., 1986, С.232.

さらに詳しいのは、ローマ教皇特使アントニオ・ボッセヴィーノの記録である。「息子イワンの3番目の妻はどういう事情でか、下着を着たままで長椅子に横たわっていた。というのは、彼女は妊娠していたからであり、自分の部屋に誰かが入って来るとは思っていなかったからである。そこに不意にモスクワ大公が彼女を訪れた。彼女はとっさに立ち上がって彼に対面したが、もはや彼をなだめることは不可能であった。公は彼女の顔を殴りつけ、そのあと自分のそばにあった杖で打った。次の夜、彼女は男の子を死産した。このとき、息子のイワンは父親のもとに駆け込み、自分の配偶者を打たないでくれと懇願しはじめたが、このことによってかえって父の憤怒と撲打を自分のほうに向かわせただけであった。彼は頭に、だいたいこめかみのところに、その杖によって非常に重い傷を負ったのである。

このことのまゝに、父に対する憤怒に駆られて、息子がかつとなって父のことをつぎのような言葉で激しく非難した。『お父さんは、僕の一番目の妻を何の理由もなく修道院送りにしたではありませんか。二番目の妻にも、まったく同じことをなさいました。いまは3番目の妻を打ちのめしています。そのために、彼女がお腹のなかに宿した私の息子を殺しているのです。』息子に怪我を負わせた父は深い悲しみに駆られて、万全を期すために、ただちにモスクワから医師たちとアンドレイ・シチエルカロフ、ニキータ・ロマノヴィチを呼び寄せた。5日目に息子は死に、すべての人々の悲しみのなかでモスクワに運ばれた。」 Поссевино А. Исторические сочинения о России XVI в. М., 1983, С.50.

以上の記述は、引用元を検証しつつ、ウィkipediaの記事「Иван Иванович (царевич)」を参照している（2022年8月2日最終閲覧）。

- (22) 三浦清美「イヴァン雷帝」堀越孝一編『悪の世界史 西洋編』清水書院、2018年、190-203頁；P・Г・スクルインニコフ『イヴァン雷帝』成文社、1994年。

ジャルスキイが率いた民衆による義勇軍が、1612年10月26日（グレゴリオ暦11月5日）、モスクワを解放した。総主教ゲルモゲンは、この檄文のためにポーランド軍に捕らえられ、獄死している。

スムータ時代、ロシアが国家の崩壊をかわろうじて回避できたのは、ロシア正教とこれを支持した民衆の力によるところがきわめて大きかった。国民軍は全国会議⁽²³⁾を招集したが、すべての階層の者たちがツァーリを頂点とする政治体制を支持した。というよりも、ツァーリを頂点とする支配体制以外のものがありうるという可能性は、まったく思いつかれもしなかった⁽²⁴⁾。

ツァーリに選出されたのは、16歳のミハイル・ロマノフであった。ロマノフ家は、イワン雷帝の愛妃アナスタシアの家系で、14世紀にさかのぼる名門貴族だった。ミハイルとその母クセニアは、しかしながら、ツァーリ即位後に予想される困難を思い、全国会議の決定を強く拒んだが、神がミハイルを選ぶように命じたのであり、受諾の拒否は神の怒りを呼び起こすだろうと脅かされて、ミハイルのツァーリへの登極をしぶしぶ認めたのだった⁽²⁵⁾。

つまるところ、ツァーリが君臨する政治体制は、ロシア民衆自らによって選択されたものであった。民衆とやや乱暴に一括りにしたが、具体的には、士族、下級士族、コサック、商人、都市民などを指す。彼らのロシア正教的な世界観によれば、ロシアのツァーリは「第3のローマ」のツァーリであり、宇宙の主宰者としての全知全能の神の、地上における代理人にほかならなかった⁽²⁶⁾。

アレクセイ帝は神に代わる地上の支配者として君臨する一方で、未曾有の大混乱のなかから外国勢力の駆逐に成功したロシア民衆と同伴するという課題を抱えることになった。民衆はツァーリを権力の頂点とする政治体制を支持していたが、権力の過剰な行使には遠慮なくNOを突きつけた。反乱は、ツァーリと民衆の独特の緊張感のなかである種の必然性をもって頻発したのだった。

(23) Земский собор.

(24) ボリス・ウスペンスキイ「ツァーリと僭称者：文化・歴史的現象としてのロシアにおける僭称」（三浦清美抄訳）甚野尚志『中近世ヨーロッパのキリスト教と民衆宗教』（科研費報告書、課題番号19320013）、2010年、88-101頁。

(25) 土肥恒之『よみがえるロマノフ家』講談社選書メチエ、2005年、19-22頁；土肥恒之『ロシア・ロマノフ王朝の大地』62-64頁；Соловьев С. М. Сочинения Книга V. История России с древних времен Т. 9-10. М.: Мысль, 1990. С.9.

(26) ファーマンの言葉を借りる。「アレクセイの時代のロシア人たちは、天地のあいだにはたった一つの真実の信仰が存在し、神の御手によって統治するたった一人の皇帝があるだけであると確信していた。」Fuhrmann, *Tsar Alexis*, p.31.「第3のローマはアレクセイ・ミハイロヴィチ以外の何人によっても統治されえないものであったろう。」ibid. p.32.

4. アレクセイ・ミハイロヴィチの人格

「中庸」という言葉を辞書で引くと、「過不足がなく調和がとれていること」という意味が載っている。この一般的な意味からすると、アレクセイ・ミハイロヴィチにはやや当てはまらない部分がある。アレクセイ帝はたいへん気短かな人だった。クリュチュエフスキイに拠れば、「生まれつき生き生きとして感受性が強く心を動かしやすかったアレクセイは、怒りやすくてすぐに自己抑制が利かなくなり、あまりに口数が多く手が早かった。」⁽²⁷⁾ 次のような例が紹介されている。

1660年、ホヴァンスキイ公がリトアニアで敗れ、二万近い軍隊が失われた。この報を聞いたアレクセイの舅イリヤ・ミハイロフスキイは会議の席で、自分に軍隊を任せてくれたらただちにポーランド王を捕虜にすると豪語した。それを聞いたアレクセイ帝は突如怒りを露わにした。「なんという大それたことを言うのか。奴隷で卑しい人間であるそなたが戦の手腕を鼻にかけるとは！ そなたがかつて出征したとき、敵にどんな勝利を収めたことがあるというのか。」こう叫んだアレクセイは老人に平手打ちをくわせ、ひげを引きむしり、宮殿の部屋から蹴りだした⁽²⁸⁾。しかしながら、クリュチュエフスキイは、このような怒りの噴出について次のようにアレクセイ帝を弁護している。

ツァーリの怒りの噴出は、しかしながら、神のまえでは地上のだれも罪を免れるわけにはいかない、神の裁きのまえではツァーリも臣下もみな同じであるという考えにあたって打ち碎かれるのであった。この考えはかたときもツァーリの脳裏から離れることはなかった。…外国人、たとえば、オーストリア大使マイエルベルクは、完全な奴隷状態に慣れた自国民に対する無制限な権力をもったこのツァーリが、他人の財産、生命および名誉を何ひとつ侵犯しないのに驚嘆せざるをえなかった⁽²⁹⁾。

激しやすい性向を乗り越えてアレクセイ帝の人格に調和をもたらししていたのは、ロシア正教の修養だった。年少時の教育は、祖父である総主教フィラレートが主導した。フィラレートは自らの孫のためにロシア正教の祈祷書をもとに教科書を作成させ、6歳のときからアレクセイ帝に文字を教えはじめた。教師はモスクワの官署の書記だった。10歳ころには、中世ロシアの中高等教育の全課程が終わっていた。アレクセイは教会でいきいきと祈りをささげ、輔祭とともに合唱隊にまじって鍵音符を追いながらかなり上手に祈祷歌を歌うことができた⁽³⁰⁾。

(27) クリュチュエフスキイ『ロシア史講話3』375頁。

(28) 同上376頁。

(29) 同上377頁；

このように、ロシア正教の古習に忠実な教育を受ける一方で、アレクセイの子供部屋には西側の習俗が流れこんでいた。幼いアレクセイに西欧的なものの興味深さや利便性を教えたのは、その扶育官ボリス・モロゾフだった。アレクセイの子供部屋には、ドイツ製の馬の玩具やおもちゃの鎧兜、カルタがあった。ボリス・モロゾフは、皇太子アレクセイの教育に西欧の文物を取り入れ、皇太子アレクセイにドイツ服を着せたこともあった⁽³¹⁾。アレクセイの成長とともに、流入する西欧の習俗は質量ともに増えていった。クレムリンには娯楽宮殿という一種のサーカス団が設けられ、ドイツ人が演技するそのサーカス団の芸をアレクセイは心ゆくまで楽しんだのである⁽³²⁾。また、アレクセイは鷹狩を非常に好み、三千羽の鷹を飼っていたと言われる⁽³³⁾。

しかしながら、娯楽宮殿で楽しい昼下がりをするがあと、アレクセイは相伴とともに礼拝堂をおとずれ、晩祷に臨むこともしばしばあった。晩祷は終夜つづき、アレクセイ帝はロシア正教の慣例どおり、そのあいだずっと立ちつくした。その忍耐強さに驚いた外国人の証言がたくさんある⁽³⁴⁾。

以上述べたように、古いロシアと新しいロシアのバランスをとった点こそが、アレクセイ・ミハイロヴィチの「中庸」と呼ぶべきものである。クリュチェフスキイが述べるように、「アレクセイ帝は、一方の足は生まれながらの正教の古い習慣にまだしっかりと下していたが、他方の足ではすでに故習の域を乗り越えようとしており、この宙ぶらりんの過渡期の立場にとどまった」⁽³⁵⁾のである。

5. 家庭と寵臣たちによる政治

ツァーリを頂点とする体制は、血統にもとづく世代の継承を前提とするため、ツァーリの家庭が政治において重要な役割を担うことになる。中世ロシアにおいては、ピョートル改革以降の宮廷と異なり、一夫一婦制がかなり厳格に保たれていた。

アレクセイ帝の場合も、1645年16歳で即位したのち、1647年に全国から200人の娘たちが集められて嫁選びがあり、マリア・ミロスラフスカヤが選ばれることになった。アレクセイ帝の嫁選びには興味深い逸話が残されている。当初、アレクセイ帝が気に入ったエフィミヤ・フセヴォロシユスカヤは、髪結いが髪をきつく結んだために、嫁選びの場で気を失って倒れ、てんかんもち

(30) 同上372-373頁。

(31) 同上373頁。

(32) Fuhrmann, *Tsar Alexis*, pp.4-5.

(33) *ibid.* pp.79-80.

(34) たとえば、アンティオキア総主教マカリオスが1654年から1656年にかけてモスクワを訪れたさい、総主教の息子、輔祭パウロスは、アレクセイ帝とその臣民たちの宗教生活について広範にわたる記述を残している。Fuhrmann, *Tsar Alexis*, pp.32.

(35) クリュチェフスキー『ロシア史講話3』372頁。

であると決めつけられて花嫁候補から脱落した。アレクセイ帝と姻戚関係を結びたかった扶育官ボリス・モロゾフが、髪結いをする女官（によかん）たちを買収したとされている⁽³⁶⁾。

結局、アレクセイ帝が選んだのは、5つ年上のマリア・ミロスラフスカヤだった。マリアは、ボリス・モロゾフの妻アンナの妹だったから、アレクセイとボリス・モロゾフの紐帯はますます太くなった。しかしながら、1648年、ボリス・モロゾフは塩一揆で蜂起した民衆に追い詰められて失脚することになる。

アレクセイ帝とマリア・ミロスラフスカヤは仲の良い夫婦で、21年の結婚生活のなかで5男8女の13人の子供をもうけた。21年の結婚生活で13人の子供というのは、考えてみればじつはたいへんな数字である。単純に計算して、マリア・ミロスラフスカヤは21年の結婚生活のなかで、11年間妊娠していたことになる。最後のお産が重かったことがマリアの直接の死因となった。生まれた女の子エウドキアも二日後に死んだ。

ロシアの国情を安定させるためには、ツァーリの家庭において健常な男子が出生することが重要だったが、アレクセイとマリアの場合、13人も子供を産みながら、男子は早逝するか、生き残っても病弱で、ツァーリの任には耐えられなかった。平和そうな家庭のなかに、ツァーリという立場の重みがのしかかり、アレクセイとマリアの家庭は不幸な結末を迎えたといってもよいかもしれない⁽³⁷⁾。

マリアを失ってから2年間やもめ暮らしをしたのち、1670年に、アレクセイ帝の人生に大きな転機が訪れる。2番目の妻となるナタリヤ・ナルイシュキナとの出会いである。アレクセイ帝とナタリヤ・ナルイシュキナとのあいだを取りもったのが、貴族アルタモン・マトヴェーエフで、1676年に没するまで、アレクセイ帝はマトヴェーエフの同伴者となる。

アルタモン・マトヴェーエフは、少年時のころアレクセイ帝の侍従だったが、後年になって1670年以降、アレクセイ帝と急速に接近し、その生活に大きな影響を与えた。マトヴェーエフは、当代きっての西欧通であった。マトヴェーエフの広大な邸宅は、西欧風の壁画、西欧から輸入された家具や数物、そのほかの美術品で飾られていて、頻繁に客が招かれていた。ロシアの風習では、ツァーリの家庭といえども、夫人はおもてに立たず、自らの家に引きこもるように暮らすのがふつうだったが、マトヴェーエフ夫人は西欧流に積極的に客を応接し、友人と親交を暖めた。そうした客の一人がアレクセイ帝だった。

ロシア正教会の分裂や妻マリアの死で疲れ果てたアレクセイ帝は、西欧の音楽が演奏され、西欧の演劇が演じられ、打ち解けた会話が交わされるマトヴェーエフ家のパーティーに慰められたようである。そこで出会ったのが、マトヴェーエフ夫人の遠縁にあたる、20歳のナタリヤ・ナルイ

(36) Fuhrmann, *Tsar Alexis*, pp.13-15.

(37) *ibid.* pp.82-89

シキナにはかならない。ちなみに、アレクセイ帝はそのとき42歳だった。

同じ頃、全国から60人の良家の淑女がアレクセイ帝の花嫁候補として集められていたが、アレクセイ帝は新しい妻として、ナタリヤ以外の女性は考えられなくなっていた。しかしながら、マトヴェーエフは伝統的な嫁選びの手続きを踏むようにアレクセイ帝を説得した。案の定、ナタリヤが正式に花嫁に決まった4日後に、アレクセイ帝がナタリヤに惚れこんだのは、魔術師であるマトヴェーエフがアレクセイ帝に媚薬を盛ったからであるという噂が宮廷を駆けめぐった。マトヴェーエフはアレクセイ帝のもとでやがて権勢を振るうことになるが、紆余曲折を経て1682年の銃兵隊の反乱で殺害される。

1671年1月22日、アレクセイ帝とナタリヤは婚礼を挙げた。2度目の婚礼は、最初の婚礼とは対照的だった。最初の婚礼が、宗教的規律を重んじる人々の影響下で、お祭り騒ぎもなく荘厳に行われたのに対し、1671年の2度目の婚礼ではふんだんに食べ物、飲み物が給仕され、派手な音楽が鳴り響き、クレムリンでのお祭り騒ぎは深更まで続いた。ナタリヤは5年の結婚生活に1男2女を授かった。結婚翌年の1672年に誕生したのが、のちのピョートル大帝である⁽³⁸⁾。

20歳の若妻は、もはやロシアの古い習慣を遵守する気がなかった。この若い妻をもっとも力づよく応援した者は、ロシアの故習を守ることに疲れ果てた夫のアレクセイ帝だった。アレクセイ帝は若妻の「同伴者」として、西欧化の新たな一步を踏み出したのだった。ロシアの故習を叩きこまれることから出発したアレクセイ帝は、一連の国事に献身的に参加するなかで、作為的ではなく、ゆっくりとムリなくしかし確実に「西欧化」の方向に舵を切っていたのである。古いロシアと新しいロシアとの宙ぶらりんの状態に耐えるアレクセイ帝の辛抱づよさは、国政の安定をもたらした。この安定がなければ、ピョートル時代の飛躍はなかった。アレクセイ帝の一生は、言葉のもっとも深い意味でロシア国家とともに歩んだ一生だったと言える。

6. 反乱と対峙するアレクセイ・ミハイロヴィチ

アレクセイ帝は、生涯に4度、大きな反乱を経験している。1648年の塩一揆、62年の銅銭一揆、68年から76年にかけてのソロフキ修道院の古儀式派の反乱、70年から71年にかけてのラージンの乱である。規模が大きかったのはラージンの乱で、長引いたのはソロフキ修道院の蜂起であるが、ツァーリが興奮する都市民と直接対峙したのは、塩一揆と銅銭一揆のふたつだった。激昂した群集に対峙することは、アレクセイ帝にとって自らの生命を危険にさらすことにほかならなかった。最後に反乱の世紀にアレクセイ帝がどう民衆と向き合ったかを見ておくことにしよう。同時代にイギリスでピューリタン革命が起こり、1649年にチャールズ1世が処刑されていることを想起していただきたい。

(38) ibid. pp.192-196.

塩一揆は、アレクセイ帝の寵臣ボリス・モロゾフが、財政難を打開するために緊縮財政をすすめる、塩を専売制にしたことに端を発している。塩の値段の高騰に怒った民衆はツァーリに嘆願書を出そうとするが、一団は蹴散らされた。一部が高官の引き渡しを求めて暴徒化する一方、モスクワでは大火が起こり、甚大な被害が出た。焼失した家屋は、1万5千から2万4千戸におよび、焼死者も1700人から2000人に上った。群衆は、この大火をボリス・モロゾフの仕業であると決めつけ、高官L. プレシチェエフを殺害し、P. トラハニオトフを斬首させた。セルゲイ・ソロヴィヨフによると、アレクセイ帝は蜂起した民衆に次のように語りかけた。

「余の名において、余の意に反して行われたプレシチェエフとトラハニオトフの悪行を知って余は残念に思う。余はそなたたちにモロゾフを引き渡すと約束した。余は彼の無罪を完全に証明することができないと告白せねばならぬ。だが、彼を裁く決心をつけることもできぬ。これは、余にとって大切な人間だ。余の妃の姉の夫である。その男を死罪に処することはまことに忍びない。」

そう言うと、ツァーリの目からははらはらと涙がこぼれ落ちた。民衆は叫んだ。

「君主が永年お健やかでありますよう。」⁽³⁹⁾

アレクセイ帝のおかげで、ボリス・モロゾフは結局命拾いし、ロシア北部のペロオゼロのキリル修道院に流された。19歳のアレクセイ帝は、暴徒化した民衆に向き合い、率直に真情を吐露している。ちなみに、ボリス・モロゾフは、4ヵ月後にモスクワに戻ってくるが、すでに政権の中心からは外れていた。

一方、1762年の銅銭一揆は、アレクセイ政府が対ポーランド戦争の戦費を調達するために、銅貨を乱発して自らの支払いにあて、国庫への納入には銀貨を要求したことから起きた。銅貨は暴落し、物価は高騰、おもに都市民が大きな損害を受けた。このとき33歳になっていたアレクセイ帝は、14年前とは違う冷静沈着で断固たる姿勢で反乱を鎮圧した。そこには、指導者としての成長の痕跡を見てとることができる。

暴動が起きたとき、アレクセイ帝は家族とともにクレムリンから7キロ離れたコロメンスコエの離宮にいた。群衆が押しかけてきたとき、ツァーリとその家族は聖餐式の最中だった。ツァーリは怯える家族に身を隠すよう命じたあとで、自らは興奮した群衆に向かう。ロシアの役人であったコトシーヒンが次のように伝えている。

ツァーリは人々にたいし、物静かな調子で、みなモスクワに引き返すように言い、聖餐式

(39) Соловьев. История России с древних времен Т. 9-10. С.464.

が終わり次第、ツァーリ自らがモスクワに行き、この件で取り調べを行い、勅令を出すからと説得した。しかし人々はツァーリに向かって話しかけ、ツァーリの着衣のボタンをつかんで、いったいどうしてそれが信じられるのかといった。ツァーリは神かけて約束し、自らの言葉のあかしに自分の手を差し出すと、彼らのひとりが両手でツァーリの手を握りしめ、みなはモスクワに帰った。人々に立ち向かわせるべき軍勢もないわけではなかったが、ツァーリは、この無礼を理由にして彼らに手出しをすることは一切まかりならぬと命じた⁽⁴⁰⁾。

ここでいったん群集は引き下がる。ところが、モスクワ市中で、徴税請負をしていた大商人ショーリンの15歳になる息子が、貧民の格好で逃げるところを捕まえると、再び激昂してコロメンスコエ村に向かう。コトシーヒンから引用しよう。群衆が、コロメンスコエ村に行幸中のツァーリのもとに到着したあとの場面である。

ショーリンの息子を連れた人々がモスクワを出ると、貴族たちはモスクワの市門という市門をすべて閉鎖するように命じ、銃兵隊の全連隊と近衛の歩兵連隊、およそ三千人に完全武装させてツァーリのもとに派遣した。ツァーリのもとからモスクワに戻る途中の暴徒たちは、ショーリンの息子を連れてツァーリのもとに赴く人々に会おうと、一団になってまたツァーリのもとに向かった。彼らは宮廷のツァーリのもとに力づくで押しかけると、彼の前にショーリンの息子を引き出したが、ツァーリはこの時ちょうど馬に乗ってモスクワに出かけようとしているときだった。ツァーリがこの少年に質問すると、人々を恐れていた彼は、命ぜられていたとおり、彼の父は貴族らの手紙を持ってポーランドに逃げたと陳述した。ツァーリは彼に見張りをつけるように命じた。暴徒たちはこの少年の言葉を根拠に、自分たちで処刑するので貴族らを引き渡すようにツァーリに要求しはじめたが、ツァーリはこの件の取り調べのため自らモスクワに行くからと取りつくろった。すると、彼らはツァーリに向かって声をあらげ、もしもツァーリが進んでくだんの貴族を引き渡さないというなら、自分たちのやり方でツァーリのもとから貴族たちを捕えるだけだ、と無遠慮な脅しをかけた。ツァーリは彼らが悪意を抱いてやってきて、無礼な脅しをかけるのを見てとり、また銃兵たちがコロメンスコエ村に到着したことを知ると、ツァーリの身辺にいた家来たちに向かって、これらの者たちを殴りつけ、斬り殺し、生き残った者たちは捕らえよ、と突然声を張り上げて命令を下した⁽⁴¹⁾。

(40) 松本栄三編訳『ピョートル前夜のロシア―亡命ロシア外交官コトシーヒンの手記』彩流社、2003年、180頁。

(41) 同上181頁。

かくして、コトシーヒンによれば、100人がモスクワ川で溺れ、150人が絞首刑にされ、7000人が捕縛された。

アレクセイ帝について話を戻そう。まず指摘しなければならないのは、周囲への腹立ちまぎれの狼藉とは全く性質の違う、国家のむき出しの暴力がここにあるということである。相手が暴徒であるとはいえ、アレクセイ帝も国家の暴力の行使とは無縁ではなかった。しかしながら、アレクセイ帝の生涯においては、国家の暴力が比較的抑制され、やむなく瀬戸際で用いられてきたということは認めてもよいだろう。

そのうえでこの場面を見ると、アレクセイ帝が群衆の激昂におびえることなく、その興奮を何とかなだめようとし、彼らと面と向かってやり取りをしたが、鎮静がどうしても困難であると見てとると、兵隊の到着を忍耐強く待って決然と暴徒の鎮圧に踏み切ったことがわかる。生涯の大半を、自我を抑制して有能な家臣の同伴者として生きたアレクセイ帝は、ぎりぎりのところでは自ら決断することができた稀有の指導者でもあった。

7. まとめ

最後に、アレクセイ帝の事績をまとめよう。民衆の義勇軍による外国勢力の駆逐によって成立したロマノフ朝は、17世紀を通して民衆の反乱に悩まされたが、アレクセイ帝は正教を軸に国家再建を志し、正教信徒であるコサックとの連帯を保って対外的な成功を収めた。超人的な努力で自我を抑えて、有能な家臣の同伴者であることを貫き、有能な家臣の国家運営によって安定がもたらされた。国家のむき出しの暴力とは無縁ではなかったが、これを乱用はせず、瀬戸際での確に用いる決断力をもっていた。信仰への真摯さはかえって教会の分裂をもたらししたが、アレクセイ帝の忍耐によって国家の統一は守られ、この安定を引き継いだその子ピョートルの西欧化改革を可能にした。ロシア国家飛躍の下地を作ったのである。以上のことが、「神の代理人」たるアレクセイ帝の「中庸の徳」の内容である。このツァーリの「中庸の徳」は、ロシアにおける指導者のあるべき姿に重要な示唆を与えてくれると考える。